

亜細亜大学の改革と新しい試み

亜細亜大学広報部長 岡部篤厚

はじめに

テレビCMを日本の大学で初めて実施したためか、本学は広告費を始めとして、莫大な経費を使って大学改革に取り組んでいるような錯覚を、世間から受けているようである。とんでもない誤解である。お陰でこれまで鼻も引っ掛けてくれなかった広告代理店やテレビ局・ラジオ局の広告部の方々が、アポイントメントもなしに直接アタックして来るなど、広報部は千客万来の賑わい。無下にお断りもできずに、日々応対に追われている。

本学の改革は、衛藤藩吉が、昭和六十二年二月一日に学長に就任してからのことであり、いわゆるUNIVERSITY IDENTITYと言われる総合的なものではない。少ない経費を有効に使いながら、できるところからの改革と、これまでどこの大学もあまり手を付けなかった新しい試み(例えば、一芸一能推薦入試、教員の公募、単位認定アメリカ派遣留学など)を実行するように努力してきたものである。

衛藤藩吉学長就任後に行ってきた改革と新しい試みなどを表に示し、ここでは代表的なもの一つを簡単に紹介する。

五か月間の単位認定 アメリカ派遣留学

本学の当面の教育方針の一つとして、世界の共通語である「英語」を「読み」「書き」「話せる」「国際人を養成しよう」と学長が提唱し、検討に検討を重ねた結果、その方法として、アメリカへの「単位認定派遣留学プログラム」(AUAP = ASIA UNIVERSITY AMERICA PROGRAM)を実施することになった。

このプログラムは、国際関係学部は必修とし、その他の経営学部・経済学部・法学部の三学部は希望者をアメリカへ留学させるというもので、二年次の前期(三月～八月)か後期(九月～翌年二月)のいずれか五か月間留学する、本学独自のプログラムである。アメリカで修得した「英語」四科目八単位、「一

本学の改革と新しい試みの主なもの

本学にあつては、

- 1 シンボルマークの決定。(S 62・10)
 - 2 日本の大学史上初めての「テレビCM」の実施。(S 63、H 2)
 - 3 五か月間の単位認定アメリカ派遣留学の実施(AUAP)亜細亜大学アメリカプログラム。(S 63、H 1)
 - 4 海外の八つの大学と新規に交流協定締結(アメリカ六大学、インドネシア・タイ国各一大学)(S 62)一芸一能(個性値)推薦入試の実施。(H 1)
 - 5 社会人入試の実施。(H 1)
 - 6 開かれた大学を目指しての地域交流、公開授業・講座等の実施。(S 63)
 - 7 教員の新聞公募。(S 62)
 - 8 「個性値」を商標登録。(H 1、H 4)
 - 9 フレッシュマン・イングリッシュ担当のネイティブ・インストラクター23人の採用。(H 1)
 - 10 2セメスター制の導入。(H 2)
 - 11 亜細亜大学フォーラムの開催。(H 3)
 - 12 以上のことなどを実行するに当たっての記者発表。(S 62・10、H 1・5)
- 学内にあつては、
- 1 事務組織の一部改変。(S 63・4、H 2・4、H 3・4)
 - 2 教員の事務部長兼務の廃止と委員長制導入。(S 63)
 - 3 全教職員会議の実施。(S 63)
 - 4 学内主要会議事録の学内公開。(S 63)
 - 5 キャンパス再開発構想の検討。(S 63)
 - 6 授業中の私語追放。(H 1)
 - 7 事務職員の自己申告書提出の義務づけと意見具申の奨励。(S 63)
 - 8 事務職員の人事考課の実施。(H 2)
 - 9 カリキュラムの大綱化による新カリキュラムの検討。(H 3)
 - 10 大学・教員の自己評価の検討。(H 3)
- などなど。



キャンパス中央にそびえ立つ白亜の総合研究館

般教育科目「二科目（アメリカ史Ⅱ人文分野、自然と人間Ⅱ自然分野）」八単位、「体育実技」一科目一単位の合計七科目十七単位が、本学での進級・卒業単位として認定される。

昭和六十三年度の前期に、パイロットプログラムとして実施したときは、受入れ大学との話し合いで四十人程とし、学内で希望者を募集した。結果は予想を大きく上回る百六十人が応募、担当職員を慌てさせた。そこで受入れ大学のワシントン州立西ワシントン大学

と折衝し、なんとか六十人の受入れを了承してもらい、選抜して送り出した。これでは平成元年度の本番ではどのくらいの希望者があるのか見当もつかなくなり、急遽新入生とその父母を対象にアンケート調査をすることとなった。その結果、実に六百人を超える希望者があった。これは、大学側が予想もしなかった人数である。

そこで受入れ大学を西ワシントン大学のほかに、州立東ワシントン大学、州立中央ワシントン大学（以上ワシントン州）、オレゴン州立大学（オレゴン州）の四大学に増やした。そして平成元年度の第一回プログラムには、五五九人の学生が前期五か月間、四大学に分かれて留学した。平成二年度からは、受入れ大学にアイダホ州のポイジー州立大学を加え、あわせて五大学とし、六八四人（前期三三九人・後期三四五人）、三年度は六六七人（前期三五〇人・後期三二七人）、四年度は七〇二人（前期三四五人・後期三五七人）と、すでに二六七二人が留学を体験してきた。

このプログラム実施のため、平成二年度からまだ不完全ではあるが、2セメスター制を導入した。この作業も、残業に次ぐ残業となった。これまでの通年科目を前期完結科目、後期完結科目、半期集中科目、そして通年科目とするなど、カリキュラムの大改革をしなればならなかったからだ。さらに、この留学を質実ともに効果を上げるために、一年次生の英語授業を「フレッシュマン・イングリッ



平成4年3月に竣工した7号館入り口

シュ」として、この授業のために採用したいわゆるネイティブ・インストラクター二十三人による、少人数の英会話を中心とした必修授業を、毎週月曜日から金曜日まで毎日行っている。このインストラクターは、全員アメリカの大学院修士課程で「非英語圏の人々に英語を教える資格」を中心に取得しており、言わば英語教育の専門家である。一年次に十回の留学事前研修を行っているが、このフレッ



州立中央ワシントン大学での英語授業 (AUAP)

シユマン・イングリッシュも、現状では欠くことのできない事前研修の一つとなっている。従来海外留学というと、とくに選ばれたほんの一部の学生が中心であったが、「希望すれば誰でも行ける」、そして「四年間で卒業できる」というのが、このAUAPの大きな特色ともいえる。

また、このアメリカ留学による異文化体験で、学生個々の成長はもとより、帰国後、明るい雰囲気と活気に満ちた新風をキャンパスに吹き込むなど、実に大きな副次的効果をもたらしたのは、このプログラムの成功を意味する。



オレゴン州立大学での英語授業 (AUAP)

おわりに

本学のいろいろな改革や新しい試み、それを社会に知ってもらうために事務組織を一部改変し、広報紙を充実した。

従来の大学広報は、イコール「入試広報」の感覚が強かったが、平成二年四月一日付けで、「トータル広報」を扱う部署として企画広報部の「広報課」を分離昇格し、「広報部」を新設した。

知っておいてほしい学内の情報を、正確かつ迅速に周知徹底させることを目的に、学生・

父母・教職員・地域市民・一般社会へ向けての「広報アジア」(タブロイド版)の充実を図った。

内容は、学内及び地域のニュース、学生・父母・教職員・地域市民の原稿であり、春夏の長期休暇を除く毎月十日と二十五日の二回、年十八回発行している。

発行部数は、毎回二万三千部で一万四千部を学外に郵送(第三種郵便認可)し、六千部を学内四か所の配布箱で学生に配布している。残り三千部は、武蔵野市内十六の郵便局の窓口、周辺銀行の窓口、市民会館の窓口、市役所の出張所窓口にかけてもらい市民が何時でも読めるように提供している。郵送のうち八千部は在学生父母に、三千七百部は全国の高等学校に、二千三百部は外国協定大学、他大学、マスコミ、企業関係等に送付している。取材・編集は、広報部職員が担当し、昭和六十三年度から、毎年度始めに広報紙を通じて募集した「学生記者」を、平成二年度から「AUAP特派員記者」をアルバイトとして採用している。

これら広報活動の展開は、それなりに現代社会に対応できるものであったと言える。つまり、本学の知名度、イメージが上がり、受験生が急増し、偏差値が上がったのは、ただテレビCMなどの広報活動だけではない。比較的短期間での思い切った改革やこの大学も実行しきれなかった全く新しい試みなどの具体的な努力が、広く社会に理解してもらえたからであるといえよう。